

沖縄では平成6年3月2日から5300日近く、連続給水記録の更新が続く。本土復帰後、台風の猛威や島しょ部ゆえの渇水など厳しい自然地理環境から制限給水が日常茶飯事だったが、水源ダムを倍増し、海水淡水化施設や送配水管網を整え、水道事情が飛躍的に改善された。この足取りは水道づくりが人々の暮らしを守る防災の営みでもあることを改めて想起させる。万が一、被災した場合、隣県は海の彼方。まずは自主自力が頼り。事業規模は大中小さまざま、緩速ろ過もあり、硬水が多

特性を活用

国際貢献

——では次に、水道ビジョンでは国際貢献が重要施策になっていますが、沖縄も熱心にJICAの水道研修を受け入れていますね。

上地 宮古島市の経験を話したいと思います。私どもの水道は緩速ろ過法で浄水処理しています。平成9年6、7月ごろ、異臭味がするという苦情電話が2〜3本ありました。それでろ過池の砂の掻き取り頻度を増やして夏場は頻繁に行うようにしました。それで解決できればよかったんですけども、どうもうまくいかない。そこで、信州大学の中本信忠教授を当時の浄水場長が訪ねました。

中本先生は「緩速ろ過は物理的な砂ろ過ではなく生物による浄化法ですから塩素をろ過池に入れるのはやめた方がよろしいですよ、生物が働かなくなってしまうですよ」と。そこで前塩素処理をやめました。その結果、藻はものすごい勢いで生えましたが、一生物が懸念に藻を取ってやると水質が良くなり異臭味の苦情も出なくなり、水がおいしくなったとの市民の声も聞こえるようになりました。

信州と宮古島で研究を行う中で、先生は熱帯やそれ以外の国々でも十分使える技術であると着眼され、結果として、アフリカ(ナイジェリア)、スリランカ、インド、インドネシア、ペルーなど各国で、また、国内でも生物浄化法を指導し施設改良や新設が検討されているとのこと。ある日、JICAの「草の根技術協力事業」というソフト的な技術協力がある事を知り、先生とご相談し、水に困っている発展途上国の方々に生物浄化法の技術を提供するために「緩速ろ過池を使用した水道の管理技術研修」を提案し、平成18、20年度の3年間の事業で採択され、今年度で3年目になります。

この研修で重要なのは対象国を宮古島と気候特性が非常に良く似たアジア太平洋州島しょ国としたこと、ソフト事業であるので対象国に対して物ではなく知恵(技術)が与えられること、それによる面的な技術の広がり、さらにはローテクなので、電気、薬品を使用することなく、途上国で自らの管理が出来る施設であること等が上げられます。濁度の高い原水だったら砂利で粗ろ過をしたあとに砂層を通して緩速ろ過をします。砂の中で活躍する微生物の力で安全な飲み水が出来ます。途上国ではポリバケツが手に入りにくいんですが、レンガや木の樽ドラム缶でろ過装置を造って、竹筒をはわせてもいい。

沖縄の水道

＝防災の日特別座談会＝

く、気象特性もあって、水道ビジョンの重要テーマである国際貢献をめぐるでも本土とは一味違う実績を示している。今年の防災週間のテーマ「明日の為に、やれること」。その体現ともいえる水道の信頼の持続・向上にまい進するリーダーにお集まりいただき、山村尊房厚生労働省水道課長(座談会開催時7月)を迎え、沖縄ならではの足跡をたどり、技術の継承、水質管理、危機管理、耐震性改善、国際貢献等の各面から将来を展望していただいた。(司会)日本水道新聞本部長・龍崎千逸

【座談会出席者】山村尊房・前厚生労働省健康局水道課長▽宮里章・沖縄県企業局企業技監▽松本親・那覇市上下水道事業管理者▽嘉陽田朝博・沖縄市水道事業管理者▽上地昭人・宮古島市水道局水道技術管理者・工務課長



沖縄本島の水道基幹施設地図を広げ、将来を展望